

不活化インフルエンザワクチンとギラン・バレー症候群の 関連についての文献的考察

コバヤシ マサユキ タケチ マリア コンドウ キョウコ オオフジ サトコ*
小林 真之* 武知茉莉亜* 近藤 亨子* 大藤さとこ*
フクシマ ワカバ マエダ アキコ ヒロタ ヨシオ
福島 若葉* 前田 章子* 廣田 良夫*

目的 不活化インフルエンザワクチン接種とギラン・バレー症候群（GBS）の関連について文献的に考察する。

方法 米国予防接種諮問委員会（The US Advisory Committee on Immunization Practices: US-ACIP）の勧告に引用されている文献を中心に、不活化インフルエンザワクチンと GBS の関連についてこれまでの報告を要約するとともに、考察を加える。

結果 1976年、米国において接種キャンペーンが実施された A/New Jersey/76インフルエンザワクチンについては GBS との因果関係が明らかであった。その後の季節性インフルエンザワクチンと GBS については、一貫した論拠は得られなかった。統計学的に有意な関連を報告した文献では、研究の限界を考慮した寄与危険は最大で100万接種あたり1.6例と推定されていた。

考察 通常の季節性インフルエンザワクチンと GBS の因果関係について、結論は得られなかった。しかし、これまで報告されているインフルエンザの疾病負担およびワクチン有効性と対比すると、インフルエンザワクチン接種が疾病負担を軽減する有益性は、観察されている季節性ワクチン接種後の GBS のリスクを大きく上まわると考察された。

Key words : A/New Jersey/76インフルエンザワクチン, 季節性インフルエンザワクチン, 有益性, ギラン・バレー症候群

* 大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学
連絡先：〒545-8585 大阪府大阪市阿倍野区1丁目
4-3
大阪市立大学大学院医学研究科公衆衛生学
小林真之